
Drop down the thunder

リキュール

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Drop down the thunder

【Nコード】

N6909Q

【作者名】

リキユール

【あらすじ】

大阪の改方学園からやってきた転校生が、蘭に恋をしてしまう。何も知らない彼は蘭への好意強めていくが・・・

1 撃目 New student (前書き)

久々に完全新作 + 普通の新蘭ものです

1 撃目 New student

“稲妻に撃たれる”

そんなことはありえないと思っていた

もちろん、稲光を光らせ雷鳴という名の轟音を鳴り響かせる雷ではない

ただ、それに近い感情を表して人はそういったとえをすることがある

「へえ〜転校生ね・・・」

工藤新一はあまり興味関心を持っていないようだった

彼は学校にいない時間が長い

そのため、転校生が来る来ないはあまり関係のないことだからだ

「何よ、もうちょっとワクワクとかしないわけ？」

新一に冷たい視線を送るのは、幼馴染で現在は恋人の毛利蘭だ

「なんでも、改方学園からくるらしいわよ

服部君と同じクラスだったかもしれないね！」

「んなもん誰に聞いたんだよ？」

「あ、興味沸いた」

「別に〜」

そうこうしていると、担任が教室へ入ってくる
生徒はざわざわと自分の席に着席する

「今日は転校生を紹介するぞ」

（うわぁー・・・今回も緊張してきたぜ・・・）

転校が初めてではないが、やはりこういう挨拶は慣れるものではない
緊張で口の中が乾いて仕方がない
こんな時だというのに、髪の毛の様子が気になってしまつのはなぜ
だろう？

「森山くん、入りなさい」

転校生、森山慶介は教室へ足を踏み入れた
女子生徒は少しざわつき、彼に熱い視線を送る

「もっ森山慶介です！ よっよろしくお願いします」

不対称な長髪、細く整えられたまゆ毛
鋭い目はまるで外国人を思わせるような風貌だった
一目で見て、世間一般でいう“イケメン”の部類に入るのであるが生
徒であることは間違いなかった

“ ちょっとやばくない?? ”

女子生徒は彼を見て嬉々として囁く

蘭の親友、鈴木園子も例外ではなかった

「 蘭くん。あの子結構いい男じゃない!? 」

「 園子、そんなこと言ったら真さんにチクるわよ? 」

皆が転校生に歓迎ムードを醸し出す中、新一は机に突っ伏せて眠っていた

まだ、朝の9時前すぎだというのに・・・

担任に促され、森山は空席になっていた蘭の隣に座る

これがすべての始まりだった・・・

一限目の休み時間、慶介はさっそく女子生徒のアプローチを受けていた

まるでアイドルを囲み、サインをねだるかのようだった

しかし、慶介はあまり乗り気ではないようで、数人と話すとトイレへ消えて行った

（ビミョーだな）

慶介が期待していた出来事は起きていなかった

転校前、改方学園在学时、慶介には思いを寄せる女子がいた

改方を離れる前にその子には告白したが、結局その子の気持ちは名探偵剣士への思いに阻まれた

そして、ここで自分に言い寄る女子生徒は大阪で好きだった子には

及ばないレベルしかいなかった

（やっぱ、あのレベルの子はなかなかいないよな・・・）

トイレから出て、手を洗う慶介は後ろから声をかけられた

「ねえ、森山くんって改方学園から来たんだよね？」

1 撃目 New student（後書き）

まだ、主人公と蘭は出会ってはいない状況です
完全新作って言ってますが、少し前に似たようなストーリーで書いたものがありますね

一応間をあげながら書いていきたいと思っています
一応主人公があまり悲しいことにはならないようにしたいんですが
展開的にはそうなりますよね・・・

2 撃目 Laughing

「ねえ、森山くんって改方学園から来たんだよね??」

そう声をかけられた慶介

声を聴いた限り、クラスの女子ではないと思い、愛想よく返事をしようと思った

第一印象が一番印象が強いとよく言われるためだ

「おお?なんでそんなこと知っ・・・てるんや?」

一瞬言葉が詰まったのにはわけがあった

そこには慶介が期待していた人が立っていた

「やっぱり!あたし大阪に知り合いいるんだー」

慶介の目には女子生徒は輝いて見えた

それと同時に自分には見えない雷が打ち付けた
それは、大阪時代のあの時と同じ感覚だった

「あたし、毛利蘭。森山くんと同じクラスなの。よろしくね」

(毛利・・・蘭ちゃんか・・・)

慶介はニヤついてしまいそうになるが、わざと素っ気ないそぶりで小さく頭を下げて

ポケットに手をつ込んで教室へ戻っていく

しかし、内心相当うれしらしく、足並みもどこか軽やかだ

教室に戻ると、同じクラスの男子が慶介に絡む

自分の態度が気に食わなかったのかと思いきや、男子は意外と仲間意識のようなものがあるらしく

ちやほやされる慶介に対し、非難よりも同情の声が多かった

「この高校の女子はあんなのばっかだからな」

なんつーか、こうミーハーするのが生きがいつていうかな？・・・

「

言えてるな。お前みたいなイケメンにやたら反応してるしな

あゝ俺も整形してキヤーキヤー言われたいもんだわ・・・」

転校初日ながら、慶介は本人の予想以上にクラスに溶け込むことができる感触を得ていた

しばらくして授業が始まる

もう少し話をしていたかったが、これも高校生と仕事なので仕方がない

教科書を開いたとき、机の隅に置いていた慶介の筆箱が床へ墜落した少し音を立てて落ちた筆箱からシャーペンや赤ペンが飛び出す

慶介はめんどくさそうにそれらに手を伸ばした時、向こう側からも手が伸びてきた

その手の主を見て慶介はもう少しで小さな声が漏れてしまいそうだった

「ほら、落としたよ？」

慶介の落としたペンを蘭は慶介に差し出した

「そうか、毛利俺の隣やったんか」

もっと早く気付けたかもしれないが、今頃慶介はそのことに気付いた
蘭はそれを慶介に渡すと自分も授業の用意を始めた

「ここで使うのが、さつき求めた式で」

授業を聞いているように見える生徒だが、大半は聞いていないよう
なものだ

机で死角をとれたと思い、携帯電話をいじる生徒はこの学校にも
見受けられるし

窓の外の景色をただぼんやり眺めている新一のような生徒も少なく
ない

こうしてこの小説を書いている私も高校の時には授業中に携帯電話
でメールをしていることもあれば

トイレへ行くフリをして、15分ほど授業をサボったこともある
慶介もそういう生徒の一人であり、時折ポケットから携帯電話を取
出し

芸能人のニュースのチェックをしているようだ

- ・アースレディーズ4人がスペシャルドラマ出演
- ・サッカー日本代表が親善試合メンバー発表
- ・工藤新一、またまた事件解決
- ・桜が今最盛期！
- ・内閣支持率が再び下落

「無限等比級数とは」

(まったく、何もいいニュースねえし、野球の話題0とか・・・)

慶介は退屈そうに携帯を見ていたが、それをやめて黒板を写した
ある程度追いついたのでペンをまわして暇をつぶしていた
本当は隣の席の蘭の様子が気になってはいたが
あまりジロジロみていると向こうも印象が悪いだろーと思ひ、控え
ていた

（早く終わらへんかなー）

3 撃目 The Day (前書き)

慶介の過去の話に少し触れます

3 撃目 The Day

退屈で意味を感じない数学の授業が終わり、生徒たちもほっと一息
校内の自動販売機で買ったジュースを飲んだり
グループで固まってくだらない会話をしたりしていた

「どうだ？慶介？昼は食堂でかつ丼食わないか？」

「ここのかつ丼、若干高めだけど結構うめえぞ？」

「そらええな。俺もまだ知らんことぎょうさんあるし、案内がてら
頼むわ」

「それより、お前どの子がタイプや？」

「え？」

「やから、どの女がイケてると思ってる？」

「ん〜俺やったら、・・・毛利やな」

“毛利”

その名前が出た瞬間、少しでも沈黙がその周りの空間を支配した
慶介はその理由がわからない

沈黙の後、みななぜか話題をそらした

慶介は話題を変えた理由を聞いたかったが、聞くより先にその話題
に合わせた

昼休み

学食には大勢の生徒が食券販売機に列をなしていた

慶介は皆に言われるままにカツ丼を選び、食堂のおばちゃんにその券を渡した

5分もしないうちにカツ丼が出てきて、慶介はグループが座る席に座った

みなが言うだけあって、カツ丼はそれなりの味だった

慶介を知らない下級生の女子は慶介に遠くから熱い視線を送っていたが

本人は気付かぬふりをして箸を進めた

午後の授業は国語だった

睡魔に襲われた慶介はノートをとるような姿勢をしながら眠っていた

『お前、それだけはやめとけって』

『ええやないか!』

『どうせ断られるだけや、諦めろ』

(なんや?これ・・・)

『森山くんの気持ちうれしい。でも・・・うちは』

(とつ 遠山?)

『こればかりはお前を応援でけへん』

(健太郎・・・)

『俺ら親友やろ?』

(は・・・服部)

慶介が見ている夢・・・

それは大阪での最後の1ヶ月の記憶だった・・・

今から2ヶ月前

慶介は父親の転勤で大阪から東京へ引越しをすることになった
大阪で寮生活をすることもできなくなかった
しかし、親にあまり負担をかけたくなかった
慶介は本音を言わず、東京への転校を決断した

「そうか・・・森山。お前・・・行っていまうんやな」

春休みの直前、慶介は親友でもある服部平次に引越しの事実を告げた

平次とは高校で出会い、よく二人で遊びに行ったものだ
平次が野球帽をかぶるようになったのも、慶介の野球好きが影響したものだ

「なんか学校おもなくなるなあ・・・」

平次はキャラにもない悲しい顔をしていた
いつもは2・5枚目の平次だが、親友との別れはやはり思うものがあつた

「そんな顔すんなよ服部。俺だって本当は行きたくなえんやから」

「・・・せやな。今はメディア通信技術が発達してるし
携帯電話つちゅう便利なもんもあるしな」

「そうそう！やから俺おらんくても大丈夫やて」

「でもまあ、なんかやり残したことあるやろ？」

約2年の改方学園での日々で唯一やり残したこと

慶介が思いついたことは一つだけだった

しかし、それを言うわけにはいかなかった

なぜなら、その件に大きく関わりを持つであろう人物がすぐそばにいるのだから

3 撃目 The Day (後書き)

コナンの世界の関係だからこういう展開はあるけど
実際“あの女に手を出したら殺される”なんて自分の周りでは聞いたことがない

今回から次回までは大阪編になります

平次たちとの関係は創作なんで、マンガからは逸脱した話

ただ、平次自体未だに謎の多い人物なんで

交友関係のねつ造はかなりやりやすかったです笑

4 撃目 Last time

慶介が改方学園に来るのも、あと1週間になった

平次や親しい友人、担任以外は慶介の転校のことは知らないというより、本人の希望で伏せてもらっていた

慶介は自分の人気にそれなりには気づいていた

入学してすぐに自分に言い寄る女子

野球部のマネージャーは慶介入部後、希望者が殺到したとか結局自分の周囲は常に雑音が生じてきた

それも沈静化し、ようやくそれなりに楽しい高校生活を送っている最後の最後に騒がれたくない気持ちこそうさせていた

2月まで厳しかった寒さも3月に入ったあたりから緩み始め

最近は少しずつではあるが、暖かさを感じられるようになった窓際の慶介はそれを敏感に感じていた

(もう春か)

気が付けば、桜もつぼみを膨らませはじめ

3年生の卒業式も終わって、誰も教室にはいなかった

どこかさみしく、どこかホラーな雰囲気も感じさせる教室を慶介は一人見続けていた

その日の帰りはもう一人の親友津川健太郎と帰っていた

「お前とこうやってここ歩くのも後少しやな」

「せやな、なんだかんだでずっと歩いてたしな」

健太郎とは帰り道が一緒という接点から親友になった

平次が探偵でなかなか遊べないが、健太郎とは釣りをしたり、梅田を徘徊したり

もつともよく遊びに行った一人である

「ほんで、なんやねん話つて・・・？」

「健太郎、俺。実はどうしても言つときたいことがあんなん」

「ストーリーッブ！まさかまさかのゲイ発言ちゃうやろな？」

「アホウ！んなしよゝもないことちゃうわい」

「そらそつやな、んで？」

しばらく黙って歩いていた慶介だが、思い切って言った

「俺最後に遠山に告つてやろう思とるねん」

健太郎は慶介の目を見た

慶介はその目の力を強め、健太郎はそれを感じ取った

「本気・・・か？」

健太郎が慶介の言葉に戸惑ってしまう理由は慶介自身もよくわかっていた

「お前、それだけはやめとけつて」

「ええやないか！」

「どうせ断られるだけや、諦めろ」

「遠山が服部のこと好きやからか？」

健太郎はそれを聞いてしばらく静かになった
慶介は続ける

「確かにあいつらの仲がええのはみんな知つとる
もちろん、俺も服部のことはようわかつとう

やけど、あいつの口から遠山を好きやということは聞いたことあらへん

遠山はあの様子からして服部のことを想とる

でも、当の服部はまだ意識しとらんとしか思われへんのや」

慶介の言うとおり、平次はまだ自分の感情をうまく把握できていない
和葉のことは“子分”だと言っていた

しかし、和葉は平次を間違いなく好きな人として見ていた

「今まで俺はずっと服部や慶介を応援しとった
でも、慶介。こればかりはお前を応援でけへん」

健太郎はそういうと、歩を進めた

4 撃目 Last time (後書き)

今回は完全に名探偵コナンとは関わりのない話
ついでにいうとこの回がなくても話は読めると思いますが
なんとなく入れてみました

5 撃目 Heartbreak

3月24日、ついに終業式がやってきた

いろいろあった2年間、最後に慶介自身の大勝負

慶介自身、ある程度わかつてはいた

“おそらく、断られる”

しかし、慶介は言うことに意味があると思っている

もし、自分がこの学校にとどまることになっていてもいずれは同じ
選択をしていたはず

幸運にもまだ平次は自分の気持ちに気づいておらず
和葉も手をこまねいている状態なのだ

「なあ、遠山。後でちよつとええか？」

式を終えて教室に戻る和葉に慶介は声をかけた

「何なん？」

放課後・・・といっても12時すぎだが、和葉が慶介のもとへきた

慶介は一つ深呼吸して話し始める

「俺、今日を最後に改方をやめるんや」

「ええ！？どないしたん??」

「実は親の仕事の関係で東京行くことになったんや
やから、この学校来るんも今日が最後！

知つとるんは、女では遠山。お前らだけや」

「そんなんもつと早よ言うてくれたらよかったやん
なんでそれが今なん？」

「それはな、お前のことがずっと気になってしゃーなかったからや
初めて席が前後したとき、髪の毛結ぼうとして俺に髪の毛ぶつ
けたやろ？」

その時は“なんじゃこいつ？”って思た
でも振り返って謝るお前は本当に素直で・・・
それからずっと、お前のことを見ていた
もちろん、お前が服部と仲がええのも重々承知や
せやけど、俺は俺やから」

和葉は少し辛そうな顔を浮かべ、慶介はその変化に気づきながらも
話を続けた

二人の間には微妙な空気が立ち込めていた

「俺は東京へ行ってしまう。でも俺の気持ちはここに預けていくこ
とにした」

慶介は下手なりに気持ちを和葉に伝えた

和葉は相変わらず辛くそして困ったような表情をしていた

「森山くんの気持ちうれしい。でも・・・うちは

「うちは、平次のことか・・・」

ここで個人名を出すのは少し失礼かもしれない
和葉はそう思った

まして相手は平次の親友でもある慶介だ

本人にも大きな傷が残ってしまうかもしれない

「やっぱあいつにはかなわんわ・・・なあ、服部？」

慶介が後ろに目をやると、平次が壁から姿を現した

「森山。そんな女のどこがええんや？」

「・・・服部、素直になれよ。もうお前に敵うことと言えば、野球
だけや」

慶介はそういうと平次と和葉に背を向けて鞆を手に持ちかえって
いった

和葉は突然の平次の登場、そして先ほどの言葉を思い出し、照れて
うつむいていた

春の匂いを絡ませた風が瞬間的に強く吹き、校庭を通った時に舞い
上げた砂をまき散らした

（そう、これでええんや・・・）

川辺に座り、太陽に照らされる川の流れを見ていた

自分の心情は大きく変わっても、景色はいつもと変わらない

「おい、森山」

どこからか自分を呼ぶ声が聞こえた気がした

振り返るが、誰もいない

しかし、確実に声は近づいてきた

「おお！ここやったか！」

声の主は健太郎ではなく、平次だった

平次はどうやらあの後すぐに慶介を追いかけていたらしい

「服部、お前どうして？」

「お前のおかげで気持ちの整理がついたんや」

「そうか、それはよかった。それで、ここにそんなことを伝えに来たのか？」

「ええやんけ。俺ら親友やろ？」

“俺ら親友やろ？”

耳元で何度もこだまするこの言葉・・・

（あの時、俺は・・・俺は・・・）

“俺ら親友やろ？”

（本当は泣いていたんだ・・・）

「ちょっと起きて？森山くん？？」

気が付くと、男子生徒が誰もいなかった
変わりに女子生徒の人数が増えていた

まだ状況をつかめていない慶介に蘭は時間割を教えてあげた

「次体育だから、早く出て行ったほうがいいよ？」

そういわれると急いで鞆ごと持って教室を逃げ出した
ふと、走っているとき目から涙がこぼれた

（涙？・・・そうか、これはあんときの涙か・・・）

5 撃目 Heartbreak (後書き)

大阪の過去編終了です

たまには平和の二人にも活躍してほしいんですが

原作でも最近出てきませんね・・・

原作といえば、その時手錠の鎖の話を蘭が気にしてましたね
あれで最終的に蘭が正体に感づくのかな？

6 撃目 U n k n o w n (前書き)

さて、いよいよ関係をちょっといじっていきます

6 撃目 Unknown

帝丹高校に来て一週間が過ぎた

慶介はもうこの学校に馴染みきつた

毎朝、走ってバスに乗る生活は改善しないといけないかもしれないがそれなりの充実感があった

そして何より、慶介は蘭を見るために学校に通っている

ストーカーとまではいかないが、授業中にわからないことを質問したりしている

今日はやや曇り気味の天気だが、雨は午後まで降らないらしい

しかし、この日はどこかいつもと空気が違っていた

学校に来て早々にいつものグループのメンバーが俺を踊り場へ連れ出した

そして、彼らはこう告げたのだ

“今日は毛利に必要以上に話しかけないほうがいい”

慶介は前々から、このクラスの男子生徒に疑問を持っていた

蘭はこのクラスでは別格の存在である

しかし、誰一人彼女に近寄るやつはいないのだ

以前も自分が“毛利”の名前を出した際、周りの連中が黙り込んで話題をそらしたことがあった

「なんやねんそれ・・・」

「今日はとにかく絶対やめといたほうがいいぞ」

なぜだかわからないが、みな少しあわてていた
その理由は後々わかっていくこととなる

一時間目はオーラルだった

オーラルの授業では毎回授業はじめに出席確認をしている
英語で名前を呼んでいく
次々と名前を呼ばれていく

「Mr. Kudo?」

慶介はそれをしつかりは聞いていなかった
しかし、女子生徒が少しだけ声を漏らしたのには気が付いた
“少しイケメンの生徒なんだろう”程度に想像して慶介はぼんやり
としていた

オーラルの授業は本当にストレスがたまる
何を言っているかわからないときはとことんわからない
突然質問されてあたふたしてしまうのが目に見えていた
“早よ終われ”と念じた時だった
自分からは遠い場所で携帯の呼び出し音が鳴りだした

（おいおい、マナー入れてへんのかよ？服部やないねんから）

慶介は音をだしたやつを心の中で非難した
しかし、クラスメイトの様子はなぜだか盛り上がっていた

「はい、工藤です」

（出るんかい！！？）

慶介は思わず声のするほうに顔を向けた

他の生徒にかぶって顔は見えないが、どこかで似たような光景を見たことがあった

“まさかな・・・”と納得させようとしたときだ

「わかりました、すぐにそっちへ向かいます！」

教室はざわつき、“工藤”と名乗った生徒は担当教員のところへ行きそして教室を後にした

何が起こっているのかよくわからないが、誰かに呼び出されてどこかへ消えて行った生徒

“この展開ってあれちゃうか？”と思い、慶介は蘭に話しかけた

「なあ、あいつもしかして」

「う・・・うん、そう。あいつが工藤新一よ」

「いや、そうやなく・・・ええ！？」

質問の答えより先に彼の本名に慶介は驚いた

工藤新一の名前を知らないという人はいない

慶介からすれば、服部と似たような高校生探偵程度の認識だった

しかし、まさかその人物がこの学校にいることは知らなかったのだ

「なんで？なんであいつここにおるねん？

ってか同じクラスやったんか？？？」

「しょうがないよ、あいつ来たの初日以来だし、普段からいてもいないようなやつだから」

慶介はこの時、蘭がする工藤新一の話を聞きながらいやな予感を感じていた

それは、やはり大阪にいたときに感じた予感に似ていた

6 撃目 U n k n o w n (後書き)

工藤さん登場です

それも1話でちらつと出てきただけで、今回もチラだけ一応こっからようやく動き出す感じです

7 撃目 De j a b u

新一が学校から去ってすぐに外は大雨になった

天気予報では降らないと言っていたが、天気はきまぐれである

「ねえ、蘭。5時間目の物理のノート先週のやつ写してる?」

「・・・」

「おい蘭さん?」

下を向いたまま微動だにしない蘭

園子が視界に入りこんでようやくその存在に気が付いた

「大丈夫なの?」

「あ、大丈夫大丈夫! ちょっととぼーっとしてただけよ」

「・・・はあゝん? さては雨ね」

さすがに鋭い園子はすぐに答えを導き出した

その才能をもう少し勉強に向けたいのには本人も重々承知している

「大丈夫よ、傘くらい警察の誰かが貸してくれるわよ」

そんな会話をすぐ隣の席で聞いていた慶介のテンションは下がり始めた

ある意味デジャブに似た状況に余計に落ち込んでしまう

朝、いきなり友人に忠告された

その意味をようやく把握し始めていた

既にある程度の構図は描けていた

「やっぱそういうことなんか・・・」

昼休み、食堂で確認をとり、またまた落ち込む

完全に大阪での体験と同じことが、いや正確には大阪より厳しい現状だ

（毛利と工藤は付き合っている・・・）

実は、転校して3日ほどして、慶介は平次に連絡をとっていた
それまでほとんど連絡をとっていない

というよりは、平次がほとんど留守であるため

向こうから連絡がない限り、こちらからは滅多にかけない

『どうや？そつちは慣れたか？』

『おう、まあな』

『そついや、帝丹やったな？俺の知り合いもそつちにおるから』

『へえ〜そうか。あ、そついや、さっそく気になる子見つけたぜ』

『お・・・おう。そら楽しみや』

『毛利蘭つて子でさ、すげえ美人やねん』

『あ・・・あああああああ？？？』

『え？どないした・・・』

携帯の電池が切れたため、会話は中途半端になった
しかし、電話の向こうでは平次はかなり驚いていた
今になっては工藤新一とも知り合いで、その彼女である毛利とも知

り合いなのだろう
あの2人の関係を知っているから驚いたと推理したら簡単なこと
だろう

「慶介、毛利だけはやめとけ・・・工藤がどうかいう問題じゃない」

しかし、慶介はそう簡単にはあきらめたくなかった
分が悪いのも上等だった

翌日、新一は欠席だった

おそらく事件の捜査に参加しているのだろう

1時間目の授業は数学Bだが、担当教員が電車の人身事故の影響で
遅刻しており自習になっていた

つといても自習しているのはまじめな生徒数人

他の生徒は机に座ってはいるが、後ろを向いてしゃべったり
机に突っ伏せて眠っている

前後の席は女子生徒なので、慶介が話せるのは蘭だけだった

「なあ、毛利。お前休みの日とか何しとん？」

「休み？んゝ部活がない日は家で家事かな？」

（家事？意外と家庭的なのか？）

「じゃあ、遊びに行くこととかあんの？」

「時々園子やほかの子たちと出かけることはあるけど・・・」

「あるけど？」

「んゝ・・・秘密」

“秘密”と言って笑顔を向ける蘭

慶介は体温の上昇を感じ取っていたが、なんとか照れていることを隠した

「でもどうして？」

「ふえっ？」

「だって、森山くんって普段はクールな2枚目！って感じだから」

「そっそら、・・・」

（お前のことが気になるから・・・）

そんなことを言ってしまうえば、相手に気持ちはモロにバレる

慶介は数秒の間に返答しなくてはいけなかったが、すでに5秒が経過していた

「クラスのやつらのことを知っときたいからや

ほら、男連中は自然とわかっていくけど、女連中は話してみなわからんからな」

蘭は“まじめなんだねゝ”というと再び微笑む

（これは・・・ガードが堅いのか、ただ単に毛利が鈍いのか・・・）

7 撃目 Dejabu (後書き)

高校の自習なんて…

というより、学校の自習なんて自習してる人少数ですよね…

僕も自習の時は誰かと話しているか、寝てるかです

蘭がただ鈍い女の子になってしまっ気がしますが…

これでいいのでしょうか？…

8 撃目 Rain

放課後、慶介は野球部の練習の様子を見学していた
今更入部するつもりはないが、野球を見ているだけで楽しい
しかし、どこか空の雲行きは怪しくなってきた
そして、すぐに大雨になった

（こらやばいわ、早よ帰るか・・・）

グラウンドで部活動をしていた生徒たちはあわてて後片付けをはじめる

遠くから見れば、アリの行列に水をかけたような様子だ

慶介はいち早く校舎内へ避難し、自分の折りたたみ傘を教室へ取りに戻っていた

その間にも雨脚はかなり強くなり、地面へたたきつける音が大きく聞こえた

傘を見つけて一安心し、下駄箱へ向かう

すると、誰かが外を見ながら立ち止まっている
後ろ姿からして女子生徒だろう・・・

「どないしたんや？」

振り返った生徒を見て慶介は一瞬動揺した
蘭だった

「あゝ・・・森山くんか」

「まさか、自分傘持つてへんのか？」

「う、うん。でも大丈夫！すぐやむと思うから」

「何言ってるねん。ほら、小さいけど一緒に入れや？」

慶介は自分自身の勇気をほめつつ、蘭を傘へ招き入れることに成功した

蘭は“帰りにスーパーで買い物するからそこまでいいよ”と言ってくれたが

自分ではできれば家まで送っていきたかった

相変わらず雨は強く振っていて、小さな傘では蘭や慶介の肩は濡れてしまった

しかし、慶介は“いつまでも降り続け！”と雨乞いをしていたその願い通り、雨はやむ気配はなかった

「そつえば、森山くん服部平次くんって知ってる？」

蘭が慶介に話を振る

「そら知つとるわ。俺とあいつは親友やからな」

「ええ！？そうなんだ！！森山くん親友だったんだ！！」

「服部は改方だけじゃなくて、関西じゃ有名な探偵やつたしな」

「やっぱり関西じゃ有名なんだ」。じゃあ和葉ちゃんのことも？

「お・・・おうそらもちろん。あいつら付き合うとるしな」

「そつかあ」

「そついや、こつちのクラスにも探偵がおるらしいな」

慶介は少し白々しく蘭に向けてその質問を試してみた

蘭は“へ？”という顔を一瞬したので

慶介は昨日の朝の出来事を思い出させた

「あゝ新一のこと？」

「そう、工藤新一。なんや？毛利。“新一”なんて呼んで

めっちゃ仲ええみたいやな」

「え・・・あ・・・うん。まあ」

慶介はこの反応で確信した

この人、毛利蘭は工藤新一のことが好きであること
そして、自分にはチャンスがないこと・・・

雨が降り続く

傘を持つ慶介は蘭に歩幅を合わせて進んでいたが

突然、蘭が立ち止まった

慶介は不思議に思い、“毛利？”と声をかけたが、反応がない
そして、少しずつ表情がこわばっていることに気づき

蘭の視線の先を追った

蘭の視線の先

そこには、缶コーヒを飲みながら、女性と仲良く会話する工藤新一の姿があった

9 撃目 Love in Lie

「・・・」

毛利は明らかに工藤の姿を見て動揺していた・・・

俺はそんな毛利の様子を知らず少し先で笑っている工藤に激しい怒りを覚えた

しかし、ここで工藤を罵倒しに行くことはできない

それはイコール毛利に気持ち悪く言ってしまうようなものだ

「どうした毛利？雨まだ止んどらんし、早くコンビニ行っしまおうや？」

すべてを隠し、俺はやさしく毛利に声をかけた

毛利も気付かれまいとわざとらしく明るい顔で返事をした

工藤は俺たちに気づくこともなく、相手の女性と話を続けていた

「はあ？工藤が女と会った？？」

その日の晩、俺は服部に今日見た出来事を報告した

服部と工藤につながりがあることは大阪にいたときに聞いていた

「そうや、あいつ女と楽しそうにしゃべったわ
あら、完全に詐欺ってるで」

「森山、工藤はそんなやつちゃうから、心配しなや」

服部はそういうが、いくら親友の服部でも信用できなかった
俺はある意味本当の工藤を見てしまったのかもしれない

帝丹^{こじ}高校へ来てまだたった1週間

あの2人の関係も完全に把握したわけではない

しかし、俺の中で工藤への怒りはとどまることを知らない

毛利は俺がいなかったら、どうしたのだろう・・・？

あのこわばっていく顔・・・

俺は正直見ていられなくてわざと素知らぬ顔をして声をかけた
それで、毛利の顔が嘘でもいいから明るくなってほしかった

俺の中で毛利の存在は遠山の存在に近づき

今、それを上回ろうとしている

週が明けた月曜日、今日はさすがに晴れていた

前日、昼寝をし夜はあまり眠れなかったのどにかく眠い

今までと同じように音楽を聴きながら携帯サイトを見ていた

「・・・い・・・おはよー」

かすかに後ろで声がしたので振り返った

声を主は毛利だった

毛利は俺が知っている毛利で、元氣のない俺に元氣をくれる

「あ、新一くこの人が森山君よ？」

毛利の後ろから歩いてきた男は・・・工藤だった

どうしてだ？

どうして、毛利はそんなに平気でいられるんだ？

どうしてそんな奴の前で笑っていられるんだ？

あの出来事がなかったかのような素振りの毛利・・・
そこまでこの男を好きなのか？

俺には理解できない

こんなきれいな女の子を差し置いて他の女と密会する神経

許せない・・・

「へえ、君が服部の言ってた森山君か」

「何や、あいつから聞いたとったんか」

「いや、話に聞いた通り男前だな」

「ハハ、そらあんたのこつちやる？工藤名探偵！」

そう、この男は本当にかっこよかった

俺とはレベルが違った

工藤新一・・・

東の名探偵で、服部の親友であり好敵手

両親は父が闇の男爵《ナイトバロン》の工藤優作で母が芸能界のレジェンド工藤有希子

生まれた環境も俺とは比べられない

俺は、こいつを相手にする

こいつが毛利と普通の関係だったとしてもだが

俺は毛利にアプローチをかける

そして、なんとかこつちを向かせる

これが俺の当面の目標だ

10 撃目 No change?

その日、慶介は新一に対するいらだちで落ち着きがなかった
2時間目と4時間目は授業を無断で抜け出し、日の当たる場所で休憩していた

(・・・なんでなんだ?)

慶介には謎だらけだ

あんな現場を見たというのに、週が明けた今日の蘭は新一とふつうにはなしていた

何かあった様子など、微塵も感じさせない態度だった

それが愛だというのなら、それは偽りの愛だろう

慶介の中では新一は少なくとも蘭を軽視していると思っ
ているため自分はそれを蘭に突きつけて自分の気持ちを伝えることができれば
相手がどんなにレベルが高くとも勝てると思っていた
それで蘭が悲しむとしても、自分がなんとかしてやる

森山慶介はそういう男だ

教室に戻った

どうやら移動教室のようで、誰もいなかった

教室のカギは持っていないが、窓のカギが開いていたのでそこから
中へ入った

蘭の席の隣の鞆、つまり自分の席の鞆から弁当を取出し、再び教室
を後にしようとした

その時だ、教室のカギが開けられた

そして・・・

「あれ？森山何やってんの？」

教室に入ってきたのは新一だった
慶介は少し焦ったが、取り乱すことなく
“今から授業に行こ思てな”
と返事を返した

「あれ？どつか力ギあいてたのか？」

「あー、後ろのほうがちよつとな」

「ったく、委員長ちゃんとやれよな」

（今、聞いてみるか？・・・）

慶介はそんな衝動に駆られていた

金曜日に見たあの現場がよみがえる

仲よさげに女性と会話する新一の姿

事件を口実に女性と密会していたその新一が今、俺と1vs1^{サン}で対決できるチャンスができた

「なあ、くど」

慶介が呼ぶより早く携帯で電話を受け取ったため、対決は実現しなかった

しかし、この2人がぶつかってしまう日はおそらく遠くない
そう慶介は感じていた

11 撃目 R e p l a y

それから3週間が経過した

あれから俺はなかなか毛利との距離を縮められなかった

そして、工藤は学校にこない日が多くあのことを聞くこともできなかった

そんなある日・・・急展開を迎えた

放課後、慶介は偶然蘭を見かけた・・・

蘭はこちらに気づいていないようで、慶介は声をかけようとしたときだ・・・

蘭は道路の向こうを見ていることに気が付いた
その視線の先には・・・新一が女性と2人だ

(あいつ・・・)

慶介の怒りの炎が火力をあげて燃え上がり始めた
蘭の元へ走っていく慶介・・・

「えっ!？」

慶介は蘭の手をつかんだ
そして、どこへ行くわけでもないが、走った
振り返ることなく走っていた・・・
手首をつかまれた蘭もそれについていくが、しばらく走ったあたり
でその手をほどこいた

「ちょっと何??？」

そりゃそうだ。蘭からすればいきなり現れて手をつかまれて走って
いくのだから

「お前、見たやる？」

毛利、工藤は完全にお前のことで遊んでる

お前がヘラヘラ笑ろて工藤に辛いのを隠しとるから

工藤はいつまでもああいうことをしているんやぞ？

ええ加減、工藤のホンマの姿に気づけ！」

「・・・」

直球すぎたかもしれない

しかし、慶介はそれを良かれと思っていた

「俺やったら、工藤みたいなことせえへん
毛利、お前だけを見続ける！」

あんなやつより、俺と・・・俺と」

「新一をあんなやつとか呼ばないで！！」

黙っていた蘭が大きな声で慶介を怒鳴る
瞳には涙をいつぱいためている

慶介は何も言えず、蘭は怒鳴り続ける

「新一はね！・・・新一は！私には嘘偽りないことくらい！・・・
わかってるんだから！」

森山くんには・・・わからないかもしれないけど

私たちには私たちの関係が・・・あるんだよ！！」

周りに帝丹の生徒どころか誰もいないことが不幸中の幸いだろう
こんな現場を見られたら、明日何を言われるかわからない

「毛利・・・その関係は間違ってる」

「何が！？森山くんにわかってもらいたくない！もうほっといてよ
！」

蘭はそいうと走って帰って行った

（終わったな・・・）

慶介は膝から崩れ落ちたい気持ちだった
転入して以来、なんとか自分に振り向かせたい

その一心で蘭への接触を続けていた
ここまでどれだけ蘭に近づけたかはわからないが
他の男子は慶介と蘭の関係をうらやむこともあった
間違いなく友人という存在にはなっていたはずだった
ほんの数分前までは・・・

作るのは時間がかかり、壊すのは一瞬
その言葉を言った人は本当に素晴らしいとこんな時に感心してしま
いそうだ

慶介は自宅までの重い足取りの中そんなことを思っていた
おそらく、明日以降蘭の自分への目は白いものになるだろう

(・・・でもわかってほしい、工藤の本性を)

慶介は確信していた

新一は完全に蘭を裏切っている

蘭は認めたくないだろうが、あれは浮気と呼んで間違いではない

(毛利を救えるのは・・・俺しかない)

蘭から嫌われたとしても、新一の本性を暴く

慶介はいつの間にか新一への敵対心であふれてしまった

11 撃目 Reply (後書き)

意外と1200文字近くあるみたいです

一応この慶介くんは非常に熱血漢だと思ってください
さて、どうなることやら…

12 撃目 Reason

蘭とのあの一件から2日

慶介は普通に登校していたが、蘭と新一はそろって欠席していた

この2人がいないことには何もできない

休み時間も普段ならバカ話をするところだが、ぼーっとしていた

「ねえ、森山くん。ちょっといいかしら？」

それは突然だった

同じクラスの鈴木園子が慶介に声をかけたのだ

慶介は“後にしてくれへんか？”と言ったが

園子は強引に襟元をつかむと、教室の外へ連れ出した

「ねえ？あなた一体何したの？」

「なんのこつちゃ？」

「あんたが蘭に何かしたってことをこの園子様が知らないとでも？」

（何！？）

慶介はあわてて口を滑らせかけたが“俺は別に何もしてねえ”と言った

「あたしと蘭は付き合い長いのよ？そんな嘘通用するとも思ってるわけ？」

「だから俺は何もとらんよ！俺はホンマのこと言っただけやし」「本当のこと？」

「それより、毛利どないしたんや？」

「蘭は・・・ちよつと体調崩したみたい。でも明日には来ると思うけど」

「そうか・・・そらよかったわ」

「ねえ、森山くん。本当のことってなんなの？」

慶介は園子にことのあらましを話した

新一が女性と密会していたこと、蘭がそれを見ていたこと
蘭に本当のことを突きつけたこと

園子はそれを聞き、蘭と同じようにつらそうな顔をした

「それ・・・ホントなの？」

「毛利も見てたはずだ・・・」

「そんな・・・新一くんが・・・」

「んなわけねえだろ？」

突然後ろで声が聞こえた

その声の主・・・それは紛れもなく

「新一くん!？」

「工藤っ!？」

「ったくよ、事件解決したら蘭が体調崩したつつし

蘭の様子見に行って学校来たら、園子がすげえ怖え顔して森山連れ出すし

聞いてりゃ、俺がまるで浮気したみてーな話になってるし」

(こいつ・・・ふざけんなよ!)

慶介はとうとう爆発してしまった・・・

12 撃目 Reason (後書き)

爆発…それはある意味死を意味する…

とは思わないでください笑

なんとか明るい小説にしようとしてるんで笑

この小説はある意味で「おいおい…」って感じですが

全部終わってから読むと「これは恥ずかしい」という小説です

13 撃目 Battle with Great Detective

「てめえ……ふざけんなよ！」

ここ数週間、ため込んでいたすべてを今……

「お前が女と会うつる場面、俺は見とつたんやからな
もちろん、毛利も見とつた

それでも毛利はお前にそんな素振り見せへんかった
それはお前のことが好きやからちゃうんか？

そやのに、お前は女との密会を続けた

自分が探偵、事件口実に遊べることをええことに
やから俺が教えてやったんじゃ、毛利に

“工藤はお前を好きでもなんでもない” ってな」

あまりにも大きな声だったため、他学年の移動している生徒も驚い
て立ち止まってしまっていた

園子はその慶介の目の色や声で慶介の気持ちがあった
もちろん、口には出さない

「おい、工藤！俺はお前のこともつとええ男やと思つとつたぞ
服部から聞いたお前は好青年そのものやった
でも違てたみたいやな、お前はただの“たらし”や」

「・・・おいおい、マシンガン Took だな。俺にもしやべらせてくれ」

慶介の怒りの権幕に比べ、新一は驚くほど冷静な目だった

「まずは、状況説明からだな
多分、お前らが見た女っていうのは・・・この人じゃないのか？」

新一は携帯を取り出すと、男女2人が映った写真を見せる

「あーっ！佐藤刑事と高木刑事！！」

2人を知っている園子はすぐに反応した
そう、新一が放課後会っていたのは佐藤刑事だった
会っていたというよりは、捜査中の休憩の合間を偶然見られたのだ
ろう

「そう、たぶん森山と蘭が見たっていう女の人は佐藤刑事だろうぜ？
だから、俺は女たらしじゃねーし、浮気もしてない」

慶介は頭のいい生徒なのですぐに状況を理解した
理解してから考えるとあまりにも先ほどの自分が恥ずかしい

「く・・・工藤・・・」

「とりあえず、ちょっと人のいない場所で話そうか？」

新一の提案で慶介は2人で立ち入り禁止になっている屋上へ無断で侵入した

屋上からの景色・・・よりは風が気持ちよかった
若干気まずい2人。何から話したらいいかわからない
先に口を開いたのは新一だった

「つで、どうすんだよ？オメー

俺はだいぶ前に蘭に聞かれてるからいいけどよ」

「ねえ、新一今日女の人といたけど・・・」

「あゝあれ佐藤刑事だよ。捜査の休憩してたところ」

「え？気付いてたの？」

「そりゃ、露骨に立ち止まってたしな」

「どうするもないやないか・・・」

「一応、俺が蘭とお前の誤解は解決しといたけどよ」

「そうか、すまんかったな。俺がややこしゅうしてもうて」

「それで？お前、蘭に告ったのか？」

空気が変わる

慶介は身震いしそうな新一のオーラの中に入ってしまった

新一と対峙する犯人はどんなプレッシャーを受けているのか

慶介は身をもって感じていた

もちろん、新一が犯罪者に与えるプレッシャーはこんなものではない

「・・・ああ、ホンマ勢いで言っでもうた

俺はお前が毛利で遊んどると勘違いしてた

それなら、毛利にそのことを伝えて、自分が本気で愛していこう
と」

新一は慶介のことをにらむことはなかった

『森山はああ見えて素直すぎて強がってしまうやつや

やけど、あいつはすべてにまじめでまっすぐや
まあ、あいつに会ったほうが早いかもしれんな』

（服部、お前のいう意味がよくわかったよ）

「森山、そんなシケたツラすんのはやめようぜ？」

「え．．．？」

「お前が生半端な気持ちじゃなかったことはわかったしよ．．．
過去に何人かいた蘭に言い寄る男の中でダントツでかつこいいよ、
お前」

「工藤、お前」

「まあ、蘭を渡すわけにはいかないけど、お前とは仲良くやってい
きてえな

服部とお前の関係には勝てないかもしれないけどな．．．」

新一はやわらかな笑顔を向けている
その表情はあまりにもまぶしい

13 撃目 Battle With Great Detective (後書き)

次回でいよいよ最終回になります

書き終わったら…そうやな

また別の企画を用意することにします

「せやる？工藤はそういうやつちゃ」

電話の向こうで平次が慶介を叱る

慶介はもちろん謝ることしかできない

「だいたい、工藤があ姉ちゃんをほっぽって別の女と遊ぶはずあらへんわ

あ・・・まずその説明したたらよかったか？」

「まあ、今だからこそ工藤が浮気するはずないって思っけどな」

「まあよかったやんけ。工藤ともわだかまりなく仲良うなれそうな感じやし」

「そうだな・・・」

「まあ、お前のほうは恋愛に関しては対名探偵2連敗」

次はこの探偵に敗北するのやら楽しみやな」

「ふざけんなよ、もうこれ以上負けてたまるか」

「まあ、お前やったらすぐええ女ひっかけるやろ？」

「しばらくは恋愛は休止したいとこやけどな」

電話を切った慶介は大きくため息をついた

大阪の探偵、東京の探偵

それぞれの彼女に恋をし、かなわなかった

こういう奇妙な経験をしたのは自分だけだろう

しかし、この2つの経験は自分に大きなプラスになっているはず...

（明日は晴れるのかな？...

最近雨ばかりけど…)

14 撃目 Lose (後書き)

最終話が中途半端なのは、一応話としてはここで終わり
だけど、彼らの生活は続いていくのでまだ終わっていないとい
うことを示したかった

最後のセリフっぽいのは少し含みを持たせています
今回の恋愛もダメだった。最近雨ばかり
明日は晴れるのか。次はうまくいくのか？
そんな意味だととらえてください

一応、改方があるんだから、もう一人江古田も書こうとは思いま
したが
そっちのバージョンは残念ながら今のところ携帯に保存されたま
まです
そのうち、虹色のほうにアップデートするやもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6909q/>

Drop down the thunder

2011年5月23日07時02分発行